

ポスト・マーロウの詩学

恋愛詩『ヒーローとリアンダー』とウォルシンガム・サークル

坂巻 政彦

1. はじめに

恋愛詩 *Hero and Leander* は、1598年に初版が Edward Blount (1562–c. 1632) によって Christopher Marlowe (1564–1593) の未完の詩として死後出版され、同年に当時新進気鋭の作家であった George Chapman (1559/60–1634) の続編を加えた第2版が Paul Linley (1586–1600) によって改めて出版された。この恋愛詩、特に Marlowe の執筆部分は William Shakespeare (1564–1616) の *Venus and Adonis* (1593) と並び、エリザベス朝を代表する恋愛詩とされている。しかし、Chapman の続編は、C. S. Lewis をはじめ様々な角度から研究されているものの、Marlowe が書いた方に比べると注目されることは少ない。¹ また先行研究は、Marlowe の遺稿と Chapman の続編の作風の違いや、Chapman の道徳や詩学といった思想的側面に注目するものがほとんどで、Chapman の続編が加えられた第2版の書籍としての構成については、もちろん指摘されることはあるが、積極的な分析は行われていない。

第2版は、Marlowe の遺稿に Chapman の続編がただ加えられたものではない。本来は切れ目のない1篇の詩であった Marlowe の未完部が2つに分割され、それぞれに梗概が付け加えられ、Chapman の続編も4つの章で書かれており、全体が6章構成となっている。章の見出しは *Sestiad* とされており、これは Chapman が敬愛していた Homer の叙事詩『イリアス』が「トロイの歌」を意味する *Iliad* と分けられていることに倣い、Hero の住む「セストス島」から作った言葉だ。また、それぞれに梗概が付けされていることも『イリアス』に倣ったものと考えられる。こうした Homer 的叙事詩調への変更に加えて、第2版で特徴的なことが、初版に付されていた出版業者 Blount による Sir Thomas Walsingham (1560/61–1630) への献辞が残されたまま、Chapman の続編が始まる前に彼自身からの Walsingham 夫人 (d. 1624) への献辞が付けされていることだ。つまり、第2版は本全体としてみると Walsingham 夫婦宛に贈られる形になっている。このことから Chapman が Marlowe との合作への意識を強く持っていたことは明らかだ。しかし、Chapman は先行研究でも指摘されてきた通り、Marlowe とは文学的態度が異なり、作風の異なる続編を書いたばかりか、Marlowe の遺稿も2つに分けて梗概を付け加えるなど変更、修正を施している。これは一見すると矛盾した態度のように見える。本発表ではなぜ Chapman が Marlowe の続編を書いたのか、書かなければならなかったのかについて考察した。この恋愛詩が出版される際の書籍商と作家、パトロン相互関係を解き明かし、Sir Thomas を中心とする同じサークルの中で、Marlowe の死、彼の遺稿という共通の対象に対して Chapman と Blount がそれぞれどのように応答したかを分析することで、Chapman の続編執筆の背景の説明を試みた。

2. Chapman と Marlowe

Chapman と Marlowe の実際の関係がどういったものであったかを示す明確なエビデンスは残っていない。しかし、Chapman による 1616年出版の Musaeus の『ヒーローとレアンドロス』の翻訳の前書きには Marlowe への名指しの言及がある (sigs. A7r–A8v)。² その中で彼は Marlowe の書いた *Hero and Leander* を ‘excellent Poem’ と呼びつつも、Musaeus のものとは大きく異なるものだと述べ、両者を差別化している。その一方で、この翻訳に先立つ恋愛詩 *Hero and Leander* の続編では、Chapman は Musaeus の系譜にある先行者として Marlowe を位置付けており、その翻訳の前書きとは全く正反対の姿勢をみせていた (sigs. F3v–F4r)。³

この姿勢の変化の背景には、Marlowe の *Hero and Leander* が出版後に「淫らな」詩として評価されたことがあると考えられる。⁴ Chapman は続編を執筆する際、Marlowe の詩が「淫らな」詩と評価されることを予見し、それに先手を打つ形で Musaeus と Hero と Leander の物語の価値の強調、Homer 的叙事詩調への変更をすることで Marlowe の詩が古典の系譜にあるという権威づけを行い、彼を Musaeus の流れを汲む古典派詩人として成型した。つまり、Marlowe を自身と Musaeus の間に位置付けることで、古典主義の詩人である自分の方に引き寄せ、「淫らな」恋愛詩作家ではなく古典の伝統の中にある詩人として印象付けようとしたのである。しかし、実際のところは Marlowe の *Hero and Leander* は「淫らな」詩として評価されてしまい、Chapman の試みは失敗に終わってしまう。そのため、Chapman は Musaeus の翻訳を改めて書き、その前書きで自身が Marlowe の恋愛詩の続編を書いた事実を伏して、彼と Hero と Leander の物語を差別化するという方向転換を行なったのだ。

3. 記念碑としての遺稿の出版

Chapman が *Hero and Leander* で試みた Musaeus、つまり Hero と Leander の恋物語を媒介とする Marlowe と Chapman

の一体化はテキスト内に限らず本の作りからも読み取ることができる。Chapmanの続編が加えられた第2版は前述の通り一冊で見ると夫婦宛になっている上に、彼は夫人への献辞の中でこの構成を2人の結婚に重ね合わせており、意識的に夫婦宛にしたことが分かる (sig. E4r)。これは、Marloweの続編を書き、彼の遺稿と一体にすることを本の構成上でも印象付けようとしていたことでもある。

この詩集において一体性がこれほどまでに強調される背景には Sir Thomas Walsingham を中心とする人間関係があると考えて間違いない。Marlowe も Chapman も Sir Thomas と懇意であった上に、初版の出版をした Blount も Sir Thomas に (親密な) 献辞を贈っており、初版と第2版どちらも彼を中心とするサークルが背後にある。Blount は Sir Thomas への献辞の中で Marlowe との友情を強調し、彼の遺稿の出版をその死の弔いとした。(sig. A3r)。⁵つまり、初版は Sir Thomas のサークルによる Marlowe の追悼を目的としていたのである。また、この追悼は Marlowe の死後に過熱した彼を無神論者とする風聞への抵抗でもあり、事実この出版を境に彼の評価は「無神論者」から「詩人」へと変化する。⁶長く懇意にしているパトロンが関係する出版であれば、Chapman がその続編を書くのも不思議ではない。また、Marlowe の詩才は悪評がある中でも常に認められており、Chapman もその詩才を一定程度は認めていたはずだ。⁷Marlowe の未完の詩の続編を書く詩人として Chapman ほど相応しい者はいないだろう。

ただし、Marlowe はその詩才は認められつつも、無神論者という宗教的な危険性と「淫らな」恋愛詩作家という道徳的な危険性の2つが付き纏っていた。 *Hero and Leander* はこの2つのネガティブイメージへの応答といえる。Blount が無神論者という悪評に対抗し Marlowe の遺稿を彼の詩人としての記念碑として世に残すことで名誉回復を試みた一方、Chapman は Marlowe を古典主義の詩人である自身の側に引き寄せることで、「淫らな」恋愛詩作家ではなく、古典の流れを汲む詩人として Marlowe を成型しようとしたのだ。

4. 結び

恋愛詩 *Hero and Leander* は Marlowe の未完部のみの初版、Chapman による続編が加えられた第2版ともに Sir Thomas を中心とするサークルと関係していた。初版では Blount は亡き友人作家の遺稿を出版し、その詩を後世へと残す形でその弔いとするを目的とした。第2版においても Blount による追悼の献辞が残されているため、Chapman などの Marlowe の死への応答ではあっただろう。しかし、書籍商である Blount と詩人である Chapman とでは少し意識に差があった。Blount は無神論者というレッテルに対抗し、Marlowe の遺稿の出版を通じて彼の詩人としての名誉を回復させることを目論んだが、どんな詩人であるべきかというところまでは考えなかった。一方で、Chapman は Marlowe の詩人としての姿に拘った。彼は「淫らな」恋愛詩作家ではなく、最古の詩人 Musaeus の流れを汲む古典派詩人として Marlowe を位置付けようとしたのだ。Marlowe は詩才は認められつつも、無神論者という宗教的な危険性、そして「淫らな」恋愛詩作家という道徳的な危険性の2つのネガティブな風聞が付き纏っていた。このネガティブイメージに対する Sir Thomas の文学サークルの応答が *Hero and Leander* の連続出版だったのだ。しかし、Chapman の試みは失敗に終わり、最後は Marlowe と Musaeus を切り離さざるを得なくなったのである。

注

¹ C. S. Lewis, 'Hero and Leander', in *Selected Literary Essays*, edited by Walter Hooper (Cambridge: Cambridge University Press, 1969), pp. 58–73; Clark Hulse, *Metamorphic Verse: The Elizabethan Minor Epic* (Princeton, NJ: Princeton University Press, 1981); Marion Campbell, "'Desunt nonnulla': The Construction of Marlowe's *Hero and Leander* as an Unfinished Poem", *English Literary History*, 51.2 (1984), 241–68; Raymond B. Waddington, *The Mind's Empire: Myth and Form in George Chapman's Narrative Poems* (Baltimore and London: The Johns Hopkins University Press, 1974).

² Musaeus, *The Divine Poem of Musaeus*, trans. by George Chapman (London, 1616), STC (2nd ed.) 18304.

³ Christopher Marlowe and George Chapman, *Hero and Leander* (London, 1598), STC (2nd ed.) 17414.

⁴ *Hero and Leander* の評価については次を参照。Roy Booth, 'Hero's Afterlife: *Hero and Leander* and 'lewd unmannerly verse' in the late Seventeenth Century', *Early Modern Literary Studies*, 12.3 (2007), 4.1–24 <<http://purl.oclc.org/emls/12-3/boother2.htm>> [accessed 20 June 2022]

⁵ Christopher Marlowe, *Hero and Leander* (London, 1598), STC (2nd ed.) 17413.

⁶ Marlowe の死後の風聞については次を参照。J. A. Downie, 'The best of Poets in that age': Christopher Marlowe's Posthumous Reputation', in *Christopher Marlowe, Theatrical Commerce, and the Book Trade*, ed. by Kirk Melnikoff and Roslyn L. Knutson (Cambridge: Cambridge University Press, 2018), pp. 258–71.

⁷ 例えば、George Peele (1556–1596) は Marlowe の死の直後というおそらく無神論者の風聞が盛んであった 1593 年に Marlowe を詩人として肯定的に評価している。George Peele, *The Honour of the Garter* (London, 1593), STC (2nd ed.) 19539.